

# ブラジル人児童と日本人児童の レジリエンス（精神的回復力）の比較

原 郁水<sup>1)</sup>，水野 由佳里<sup>2)</sup>，村田 育世<sup>3)</sup>，古田 真司<sup>4)</sup>，村松 常司<sup>5)</sup>

【要旨】滞日ブラジル人児童のレジリエンス（精神的回復力）の実態を調査する目的で、愛知県内の小学校2校に在籍する5～6年生544名（日本国籍495名・ブラジル国籍49名）を対象に、無記名自記式質問紙法による調査を行った。レジリエンスとその下位尺度およびセルフエスティーム得点は、日本人児童とブラジル人児童の間に有意な差は見られなかった。そこで、性別と学年を要因とした二元配置分散分析を行ったところ、日本人児童では、レジリエンスおよびセルフエスティーム得点は、性別、学年、およびその交互作用とも有意な関連が示されなかったが、ブラジル人児童では、性別や学年の違いの影響を強く受けており、いずれも6年生男子の値の低さが際立っていた。

キーワード：レジリエンス，精神的回復力，セルフエスティーム，滞日ブラジル人，児童

## I. はじめに

近年、就労目的で来日するブラジル人が増加している。法務省入国管理局によると、日本では現在267,456人のブラジル人が暮らしており、その数は10年前の約2倍、20年前の約5倍に上る。また、同統計によると5歳～9歳までのブラジル人は16,030人、10歳から14歳までが14,763人と就労者の家族であるブラジル人児童も増加している<sup>1)</sup>。

親の就労に伴って日本にやってくるブラジル人児童に様々な困難があることは想像に難くない。先行研究<sup>2) 3) 4)</sup>によると、彼らは言葉の壁や文化の違い、家庭の不安定さ、いじめ・差別感等の問題を抱えている。言葉がわからないと、まずコミュニケーションがとれず、それ自体がストレスとなる。また、ブラジルでは学校は勉強をし、授業を受けるだけの場であるという考え方が主流であり、日本のように半強制的なクラブ活動や掃除当番などはなく、半日の授業が終わればすぐに帰宅できる。それに対して日本の学校では、クラスの調和が基本となるもので、一つの枠組みの中で統一行動をとることが主体

となっている。子どもたちは「みんなと同じ行動をする」という同化圧力を教師や他の子どもたちからも感じているという。またこうした日本の学校での教育は、子どもたちだけでなく、子どもたちの親にも違和感として感じられている。それを説明しお互いに理解をはかろうにも、両者間で言葉が通じないという問題のため歩み寄りが困難なこととなっている<sup>2)</sup>。ブラジル人児童をはじめとした外国人児童の増加を踏まえ、学校では、国際教室や日本語指導教室を設け、取り出し指導や補足的な指導、チーム・ティーチングによる指導など特別な指導形態を交えながら適応指導や日本語指導が行われている<sup>5)</sup>。しかしこれらの支援も十分とは言えず、ブラジル人児童は様々な困難を抱えていると言える。

こうした困難や逆境に直面しても、これを乗り越える精神的回復力（レジリエンス）が注目されている<sup>6) 7)</sup>。レジリエンスはいまだ明確な定義がなされていないが、本研究ではその個人の特性としての側面に注目し、「困難な状況に直面してもうまく適応する、あるいは回復を導く心理的特性」と定義する。これまでの研究により、日本の中学生においても、レジリエンスが高い状態にある者は、病気や災害などの非日常的なストレスの他に、日常生活におけるさまざまストレス経験を乗り越える因子となりうるということが明らかになっている<sup>8)</sup>。

本研究は、滞日ブラジル人児童と日本人児童のレジリエンスを調査して比較することで、特に、様々な困難に立ち向かっていると思われる

平成22年12月6日受理

<sup>1)</sup> 横浜市立保土ヶ谷小学校

<sup>2)</sup> 愛知県立豊川養護学校

<sup>3)</sup> 豊橋市立南部中学校

<sup>4)</sup> 養護教育講座

<sup>5)</sup> 愛知教育大学副学長

ブラジル人児童の精神状態に関する実態を明らかにする目的で実施された。

## Ⅱ. 対象と方法

### 1. 調査対象と調査時期

調査対象は、愛知県内のA・B小学校の5～6年生の児童、合計544名である。A小学校では日本国籍285名、ブラジル国籍17名であり、B小学校では日本国籍が210名、ブラジル国籍32名であった。回答に不備の無かった521名（有効回答率95.8%）を分析の対象とした。2009年10月中旬から10月下旬にかけて、各小学校において実施した。

### 2. 調査方法

調査は無記名自記式質問紙調査票によって行った。調査用紙は、日本語版とポルトガル語版（日本語付き）の2種類を用意し、各教室で学級担任が、各児童の言語能力に合わせ回答できる言語の調査票を配布して記入させ、その場で回収を行った。ポルトガル語訳はA小学校の国際教育に携わる日系ブラジル人教員の協力によって作成した。また、調査項目の適切さと、回答可能性を高めるため、調査対象校の校長および教員の協力を得て、各項目のチェックをお願いした。

### 3. 調査内容

調査項目は、それぞれの学年と性別、精神的回復力尺度（レジリエンス尺度）、およびRosenbergによるセルフエスティーム全般性尺度である。なお、児童の国籍は、両者の調査用紙が異なることから判別した。

#### （1）レジリエンス尺度

レジリエンスの測定には、小塩ら<sup>6)</sup>が、先行研究を参考に作成した「精神的回復力尺度」の質問項目24項目を用いて実施した。ただし、これらの項目は大学生を対象として作られたため、小学生への質問として適した表現に若干修正して使用した。具体的な質問内容は、「いろいろなことにチャレンジすることが好きだ」「新しいことや珍しいことが好きだ」などの項目からなる「新奇性追求」と、「自分の感情をコントロールできるほうだ」「動揺しても自分を落ち着かせることができる」などの項目からなる「感情調整」、 「自分の未来にはきっといいことがあると思う」「将来の見通しは明るいと思う」などの「肯定的な未来志向」の3因子から構成されている。「はい」「どちらかというとはい」「どちらでもない」

「どちらかというといえ」「いいえ」の5段階で回答を求め、段階順に5点～1点に点数化した。本調査では、調査対象者の年齢や国籍などが異なるため、再度因子分析を行い、下位尺度も含めた検討を行った。

#### （2）セルフエスティーム尺度

セルフエスティームの測定には、Rosenbergの「全般」尺度の日本語版<sup>9)</sup>の10項目を使用した。具体的な質問内容は、生活の満足感、自己の長所への気づき、人間関係の中の役割意識、行動面でも失敗への不安などを取り上げている。「そう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「そう思わない」の4段階で回答を求め、段階順に4点～1点に点数化し合計点をセルフエスティーム得点とした。

## Ⅲ. 結果

### 1. レジリエンス尺度の検討

本研究で得られた日本人児童およびブラジル人児童の質問紙調査データにより、レジリエンス測定のための24項目を用いて、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が0.40以下となった項目を除いて再度因子分析を行う作業を繰り返し、最終的に4因子14項目からなるレジリエンス尺度を作成した。分析結果を表1に示す。第1因子は「自分には将来の目標がある」、「自分の目標を大切にしている」などの4項目が高い正の負荷量を示しており、将来の夢や目標をもつことや将来の計画を立てること等の肯定的な未来志向を表す「未来志向」因子と解釈した。第2因子は「ものごとに対する興味や関心が強い方だ」、「いろいろなことにチャレンジするのが好きだ」などの4項目が高い正の負荷量を示しており、ものごとに興味や関心を持ち、追求していく「興味・関心の追求」因子と解釈した。第3因子は「パニックになっても、自分を落ち着かせることができる」、「いつも冷静でいられるようところがけている」などの3項目に正の負荷量が高く、内的な感情状態を調整することができることを表す「感情調整」因子と解釈した。第4因子は、「イライラをおさえられなくなる」、「つらい出来事があると耐えられない」などの3項目に負の負荷量が高く、困難な状況や気分差に左右されず耐える力を表す「忍耐力」因子と解釈した。これらの下位尺度の内的整合性（信頼性）を示すクロンバック $\alpha$ 係数は、それぞれ $\alpha=.84$ （未来志向）、 $\alpha=.67$ （興味・関心の追求）、 $\alpha=.64$ （感情調整）、 $\alpha=.57$ （忍耐力）

表1. レジリエンス因子分析結果

レジリエンス項目	因子				
	I 未来志向	II 興味・関心の追求	III 感情調整	IV 忍耐力	
12 自分には将来の目標がある	.884				
24 自分の目標を大事にしている	.762				
9 自分の将来に希望をもっている	.737				
15 自分の目標のために努力している	.547				
7 ものごとに対する興味や関心が強い方だ		.687			
1 いろいろなことにチャレンジするのが好きだ		.595			
4 新しいことやめずらしいことが好きだ		.551			
11 ねばり強い人間だと思う		.504			
5 パニックになっても、自分を落ち着かせることができる			.769		
8 いつも冷静でいられるようこころがけている			.556		
2 自分の感情をコントロールできる方だ			.464		
21 イライラするとおさえられなくなる※				.621	
17 つらい出来事があると耐えられない※				.612	
19 その日の気分によって行動が左右されやすい※				.448	
固有値	4.239	1.77	1.24	1.143	
変動率 (%)	30.28	12.643	8.854	8.165	
累積変動率 (%)	30.28	42.923	51.777	59.942	
信頼性 ( $\alpha$ )	.846	.67	.644	.57	
	因子間相関	I 因子	.59	.406	.147
		II 因子		.504	.209
		III 因子			.388

註1) ※：逆転項目

註2) 主因子法により因子を抽出し、プロマックス回転を行った

註3) 因子負荷量0.4以上のものを掲載

註4) 因子負荷量が0.4未満の項目を削除し、因子分析を繰り返して、最終的に10項目を削除した

註5) 項目の数字は、質問紙上の順番を示す

表2. レジリエンスおよびセルフエスティームの平均値 (S.D.) の国籍別比較

	ブラジル (N=46)	日本 (N=475)	t検定	
レジリエンス得点(合計)	49.9(10.0)	50.8(8.3)	t=0.73	p=.464
(下位尺度) I 未来志向	16.0(4.3)	16.4(3.7)	t=0.54	p=.588
(下位尺度) II 興味・関心の追求	15.4(3.1)	15.4(3.1)	t=0.18	p=.861
(下位尺度) III 感情調整	10.4(3.0)	10.3(2.6)	t=-0.22	p=.829
(下位尺度) IV 忍耐力	8.1(2.8)	8.7(3.0)	t=0.73	p=.155
セルフエスティーム得点	25.8(4.8)	26.0(5.5)	t=0.26	p=.793

註1) 国籍別比較はt検定：すべて有意差なし

註2) レジリエンス各項目の回答は、1. はい、2. どちらかというとはい、3. どちらでもない、4. どちらかというといいえ、5. いいえ、の5段階で行わせ、因子分析で得られた下位尺度の項目別に集計し、さらにその合計をレジリエンス得点とした。

註3) セルフエスティーム各項目の回答は、1. そう思う、2. ややそう思う、3. ややそう思わない、4. そう思わない、の4段階で行わせ、セルフエスティームが高いほど数値が高くなるように集計したものをセルフエスティーム得点とした。

と、いずれも高い傾向にあった。各項目の合計得点をそれぞれ未来志向得点、興味・関心の追求得点、感情調整得点、忍耐力得点とし、さらに14項目の合計得点をレジリエンス得点とした。

## 2. 各得点の国別比較

表2に国籍別の各レジリエンス得点およびセルフエスティーム得点の平均値と標準偏差を示した。また、ブラジルと日本のレジリエンス得点と4つの下位尺度得点、セルフエスティーム

得点の平均値についてt検定によって比較した。日本とブラジルのレジリエンスおよびその下位尺度、セルフエスティーム得点ともに、日本人児童とブラジル人児童の間に有意な差は見られなかった。

### 3. 国別に見たレジリエンスとセルフエスティーム

本調査では、国籍ごとのセルフエスティーム得点の平均値 (S.D.) が、日本人児童が25.8 (4.8)、ブラジル人児童が26.0 (5.5) であった。セルフエスティームの高低と各レジリエンスとの間にどのような関係があるかを検討するために、平均値 ± 1/2 S.D. の範囲内であった者を中群 (本

データの場合、日本・ブラジルともに24~28点)、これより低い群を (23点以下) を低群、これより高い群 (29点以上) を高群として、全体を3群に分けた。さらにセルフエスティームの高低を独立変数、レジリエンス各得点及び合計得点を従属変数とした分散分析を行った。分析結果を表3~表7に示す。日本人児童の場合は、セルフエスティームの高群から中群、低群となるごとに、レジリエンス各因子およびレジリエンス合計得点の平均値は低下し、多重比較でも、すべての因子および合計得点で、低群・中群・高群のすべての組み合わせで、セルフエスティームが高い群が低い群より有意に高くなるという

表3. セルフエスティーム (SE) 得点3群からみたレジリエンス因子1 (未来志向)

SE得点	未来志向	日本		ブラジル	
		平均値 (S.D.)	N	平均値 (S.D.)	N
低群		14.7 (4.5)	141	12.9 (5.6)	10
中群		16.4 (3.2)	191	16.2 (3.7)	24
高群		18.0 (2.4)	143	18.3 (2.2)	12
一元配置分散分析		F=34.17 p=.000**		F=5.34 p=.008**	
多重比較		低群<中群<高群		低群<高群 中群<高群	

表4. セルフエスティーム (SE) 得点3群からみたレジリエンス因子2 (興味・関心の追求)

SE得点	興味・関心の追求	日本		ブラジル	
		平均値 (S.D.)	N	平均値 (S.D.)	N
低群		13.8 (3.5)	141	13.4 (4.1)	10
中群		15.4 (2.5)	191	15.3 (2.5)	24
高群		17.1 (2.4)	143	17.1 (2.2)	12
一元配置分散分析		F=46.76 p=.000**		F=4.55 p=.016*	
多重比較		低群<中群<高群		低群<高群	

表5. セルフエスティーム (SE) 得点3群からみたレジリエンス因子3 (感情調整)

SE得点	感情調整	日本		ブラジル	
		平均値 (S.D.)	N	平均値 (S.D.)	N
低群		9.2 (2.8)	141	7.9 (3.6)	10
中群		10.3 (2.2)	191	10.7 (2.5)	24
高群		11.4 (2.2)	143	11.8 (2.0)	12
一元配置分散分析		F=31.67 p=.000**		F=6.38 p=.004**	
多重比較		低群<中群<高群		低群<中群 低群<高群	

表6. セルフエスティーム (SE) 得点3群からみたレジリエンス因子4 (忍耐力)

SE得点	忍耐力	日本		ブラジル	
		平均値 (S.D.)	N	平均値 (S.D.)	N
低群		7.6 (3.2)	141	7.1 (3.1)	10
中群		8.6 (2.6)	191	8.4 (2.4)	24
高群		10.0 (2.8)	143	8.2 (3.2)	12
一元配置分散分析		F=24.85 p=.000**		F=6.38 p=.455	
多重比較		低群<中群<高群		N.S.	

表7. セルフエスティーム (SE) 得点3群からみたレジリエンス合計得点

SE得点	レジリエンス合計		日本		ブラジル	
	平均値 (S.D.)	N	平均値 (S.D.)	N	平均値 (S.D.)	N
低群	45.3 (8.8)	141	41.3 (13.7)	10		
中群	50.7 (6.4)	191	50.6 (7.1)	24		
高群	56.5 (6.1)	143	55.4 (6.4)	12		
一元配置分散分析	F=88.52 p=.000**		F=7.16 p=.002**			
多重比較	低群<中群<高群		低群<高群 中群<高群			

表8. レジリエンス得点およびセルフエスティーム得点を従属変数、性別と学年を独立変数とした二元配置分散分析結果 (日本人児童)

		5年		6年		性別(主効果)		学年(主効果)		性別×学年(交互作用)	
		平均値 (S.D.)	平均値 (S.D.)	平均値 (S.D.)	平均値 (S.D.)	F	p	F	p	F	p
レジリエンス得点(合計)	男子	51.0(9.3)	50.1(8.0)	F=0.26	p=.611	F=0.88	p=.347	F=0.06	p=.815		
	女子	51.1(8.8)	50.7(7.7)								
(下位尺度) I 未来志向	男子	16.1(4.1)	16.0(3.6)	F=3.77	p=.067†	F=0.77	p=.380	F=0.46	p=.500		
	女子	16.9(3.5)	16.4(3.5)								
(下位尺度) II 興味・関心の追求	男子	15.4(3.2)	15.6(3.1)	F=0.35	p=.553	F=0.17	p=.678	F=1.35	p=.279		
	女子	15.6(3.2)	15.1(2.9)								
(下位尺度) III 感情調整	男子	10.5(2.7)	10.1(2.5)	F=0.03	p=.853	F=2.94	p=.087†	F=0.03	p=.857		
	女子	10.5(2.6)	10.1(2.4)								
(下位尺度) IV 忍耐力	男子	9.1(3.1)	8.4(2.9)	F=0.14	p=.706	F=0.12	p=.730	F=7.75	p=.006**		
	女子	8.2(3.1)	9.1(2.6)								
セルフエスティーム得点	男子	25.8(5.9)	26.6(6.1)	F=0.45	p=.501	F=1.44	p=.230	F=0.11	p=.739		
	女子	25.7(5.3)	26.1(5.0)								

註1) それぞれの人数は、5年生256名(男子125名, 女子131名), 6年生219名(男子93名, 女子126名)。

註2) 検定は、「性別」および「学年」の二元配置分散分析, †:  $p < 0.10$ , \*:  $p < 0.05$ , \*\*:  $p < 0.01$ 。

結果を得た。また、ブラジル人児童においても、ほぼ同様の結果が得られたが、レジリエンス第4因子の忍耐力に関してのみ、セルフエスティームの高低との間に有意な関連性を認めなかった。

#### 4. 国別に見た各得点の男女差と学年差

次に、児童のレジリエンスとセルフエスティームに関するより詳細な情報を得るため、性別(男・女)と学年(5年生・6年生)を独立変数、各レジリエンス得点(下位尺度を含む)とセルフエスティーム得点を従属変数とした二元配置分散分析を行い、性別と学年がレジリエンスやセルフエスティームに与える影響を検討した。国籍ごとの分析結果を表8および表9に示す。表8に示すように、日本人児童の場合レジリエンス得点およびセルフエスティーム得点は、性別、学年、およびその交互作用とも有意な関連が示されなかった。すなわち、これらの得点は、性別や学年の違いであまり変化しないことが明らかとなった。ただ、レジリエンスの下位尺度

を見ると、第1因子の「未来志向」は女子の方が男子よりやや高い傾向が( $p=.067$ )、第3因子の「感情調整」は5年生より6年生の方がやや低下する傾向( $p=.087$ )が見られた。第4因子の「忍耐力」は交互作用が有意( $p=.006$ )であった。そのため、単純主効果の検定(Bonferroni)を行ったところ、女子において学年の主効果が有意であり( $p=.021$ )、5年生より6年生の方が高かった。また、5年生においては性別の主効果が有意であり( $p=.020$ )、男子より女子の方が低かった。

これに対して表9に示すブラジル人児童の場合、レジリエンス得点およびセルフエスティーム得点は、性別や学年の違いの影響を強く受けており、いずれも6年生男子の値の低さが際立っていた。レジリエンス得点では性別と学年の主効果、交互作用がいずれも有意であり(順に $p=.004$ ,  $p=.003$ ,  $p=.049$ )、女子よりも男子の方が、また5年生よりも6年生の方が低くなっていた。単純主効果の検定(Bonferroni)の結果、男子に

表9. レジリエンス得点およびセルフエスティーム得点を従属変数、性別と学年を独立変数とした二元配置分散分析結果（ブラジル人児童）

		5年		6年		性別(主効果)		学年(主効果)		性別×学年(交互作用)		
		男子	女子	男子	女子	F	p	F	p	F	p	
レジリエンス得点(合計)		51.7(7.4)	54.3(6.7)	38.4(12.9)	51.4(6.2)	9.11	0.004 **	9.97	0.003 **	4.09	0.049 *	
(下位尺度) I	未来志向	男子	17.0(3.4)	11.7(5.6)	17.6(2.5)	16.4(3.8)	5.52	0.025 *	8.25	0.006 **	3.13	0.084 †
		女子	17.6(2.5)	16.4(3.8)	17.6(2.5)	16.4(3.8)						
(下位尺度) II	興味・関心の追求	男子	15.8(2.8)	13.0(4.0)	16.1(2.4)	15.9(2.6)	3.35	0.074 †	2.80	0.102	1.89	0.177
		女子	16.1(2.4)	15.9(2.6)	16.1(2.4)	15.9(2.6)						
(下位尺度) III	感情調整	男子	10.7(2.8)	8.1(3.3)	11.4(2.2)	10.8(3.2)	3.78	0.059 †	3.41	0.072 †	1.30	0.262
		女子	11.4(2.2)	10.8(3.2)	11.4(2.2)	10.8(3.2)						
(下位尺度) IV	忍耐力	男子	8.3(2.4)	5.7(2.4)	9.1(2.6)	8.4(3.0)	5.05	0.030 *	4.82	0.034 *	1.48	0.232
		女子	9.1(2.6)	8.4(3.0)	9.1(2.6)	8.4(3.0)						
セルフエスティーム得点		25.8(3.5)	27.9(4.2)	22.1(6.1)	26.1(4.4)	4.82	0.034 *	4.28	0.051 †	0.55	0.463	

註1) それぞれの人数は、5年生が29名（男子15名、女子14名）、6年生が17名（男子9名、女子8名）。

註2) †:  $p < .10$ , \*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ 。

において学年の主効果が有意であり ( $p=.002$ )、5年生より6年生の方が低かった。また、6年生において性別の主効果が有意であり ( $p=.014$ )、女子よりも男子の方が低かった。セルフエスティーム得点では、性別の主効果が有意であり ( $p=.034$ )、女子よりも男子の方が低くなっていた。学年の主効果は有意傾向であった ( $p=.051$ )。レジリエンスの下位尺度を見ると、第1因子の「未来志向」は、性別と学年の主効果が有意であり、性別にみると女子が男子より高く ( $p=.025$ )、学年別にみると6年生が5年生より低かった ( $p=.006$ )。第2因子（興味・関心の追求）、第3因子（感情調整）、第4因子（忍耐力）においても、性別では女子が男子より高い傾向が見られ、第2因子（興味・関心の追求）と第4因子（忍耐力）では、学年でも6年生が5年生より低い傾向が見られた。

## IV 考察

### 1. レジリエンスについて

今回のレジリエンス（精神的回復力）をはかる際に使用した、小塩ら<sup>6)</sup>の精神的回復力尺度の妥当性を検討するため、因子分析を行ったところ、明るくポジティブな未来を予想し、その将来に向けて努力しようとする「未来志向」、新たな出来事に興味や関心をもち、様々なことにチャレンジしていこうとする「興味・関心の追求」、自分の感情をうまく制御することができる「感情調整」に加え、自己の気分や困難な状況に、

行動や感情が左右されない「忍耐力」という4つの因子を抽出した。第1～第3の因子である「未来志向」「興味・関心の追求」「感情調整」は、小塩らの先行研究において見出された構成要素である。また、第4の「忍耐力」においては、小塩らが先行研究からレジリエンス状態にある若者を、特に忍耐力のある者として尺度作成をしており、小塩らの研究では「感情調整」としてまとめたものの、レジリエンスの因子としては妥当性があると言える。これらを用いて分析を行った。

### 2. 各得点について

下位尺度も含めたレジリエンスとセルフエスティームは、全体としては、日本人児童とブラジル人児童の間に大きな差は見られなかった。これまでに日本にいるブラジル人児童のレジリエンスやセルフエスティームについて調べた研究はほとんどないが、杉岡<sup>9)</sup>は、公立学校での日系ブラジル人児童（小学5～6年生）の「学校適応感」を同年代の日本人児童と比較して調査している。これによると、一部の尺度ではむしろ、日本人児童よりもブラジル人児童の適応感の方が有意に高く、他の下位尺度においても日本人児童と有意差は見られなかったことを報告している。これは、多くの日常ストレスがあると想像されるブラジル人児童の心理状態が、意外に良いのではないかと思わせる報告であり、本研究の結果も、これに近い内容であったと言える。加えて、本研究の調査対象者が学校に通っ

ているブラジル人児童であったこともこれに関連しているのではないかと考えられる。先行研究<sup>10)</sup>では、日本にいながら学校に通っているブラジル人生徒は50～60%であり、現在日本社会への適応に問題を抱えていたり、将来に問題を抱えると推測されるハイリスク集団はすでに不就学となり、対象者に含まれていない可能性があるとして予測している。そのため、本研究でもブラジル人児童と日本人児童との間にセルフエスティームの高低に関する差が見あたらなかった可能性もある。

また、ストレスが多いと想像されることから、様々な困難を乗り越えてきたブラジル人児童のレジリエンスは日本人児童よりも高いのではないかと予想していたが、それに反して差は認められなかった。これより先行研究と同様に困難が多いということが一概にレジリエンスを形成し高めていくというわけではなく、レジリエンスの高い子どもは、困難が多くとも適応的であるということがうかがえる。

### 3. 国別に見たセルフエスティームとレジリエンスについて

本研究では、セルフエスティームを3群に分け、各得点の分散分析を行った。その結果、日本人児童およびブラジル人児童ともに、セルフエスティームが高いほうがレジリエンスが高くなっていった。小塩ら<sup>6)</sup>の報告でも、大学生におけるレジリエンスおよびその下位尺度がすべて、自尊心尺度と有意な正の相関を示していた。これは、レジリエンスとセルフエスティームの概念がかなり近いことを示している。しかも、これは日本人児童とブラジル人児童に共通する要素であることが明らかとなった。

最も大きな相違点として、ブラジル人児童ではレジリエンス第4因子の「忍耐力」とセルフエスティームの高低との間に有意な関連性を認めなかったが、日本人児童では両者の間の相関が有意であったことが挙げられる。これは、ブラジル人児童が様々なことに我慢できるかどうかセルフエスティームと関係が無いということを表していると考えられる。ストレスが多いと考えられるブラジル人児童にとっても、日本人児童と同様に、忍耐力の高低はセルフエスティームと関連していると予想されたが、実際には、彼らにとってはそれが我慢できるかどうかではなく、彼らなりの方法で乗り越えることができるかどうか重要なものかもしれない。中学校における「日本語教室」で行ったブラジル人生徒への参与観察によると<sup>11)</sup>、彼らは、日本人

生徒からの同化圧力に屈するのではなく、機会を見計らって仲間と結託し、その場その場の抑圧的な状況を乗りきっているという。これは中学校の事例であるが、ここからブラジル人児童にとってはその文化的背景から困難を我慢して受け入れるということよりも、少々日本の文化に馴染まなくても、自分たちのやり方で乗り越えること（すなわち忍耐力以外のレジリエンスの高さ）がセルフエスティームと関連していることがうかがえる。

しかしより詳細に、性別および学年別にレジリエンスの各因子とセルフエスティームを検討したところ、日本人児童では、性別や学年であまり大きな差はみられなかったが、ブラジル人児童では、性別や学年の違いによる差が大きいことが明らかとなった。また、交互作用の検定の結果、特に6年生男子のレジリエンスやセルフエスティームの低さが顕著であることが明らかとなった。

6年生のブラジル人児童のセルフエスティームが低い理由の一つとしては、将来の不安定さが挙げられる。宮島<sup>12)</sup>によると、日系南米人の子どもたちは、親次第でどこで生きるか分からない状況にあり、進路を選定するにあたってのモデルが欠如しているため、進学意識が低く、一時しのぎ的選択をしがちだという。このことから、6年生のブラジル人児童（特に男子）は、小学校の最終学年ということもあり、将来に対しての見通しができていないと考えられ、「未来志向」が5年生よりも著しく低くなったのではないかと考えられる。

また、中学校と小学校のギャップも6年生のセルフエスティームやレジリエンスが低い理由の一つとして考えられる。比較的自由的な小学校に比べて、中学校ではより「生徒らしさ」が要求される。ブラジル人の子どもたちが、日本の学校とりわけ中学校に通い始めてまずショックを受けるのが取り決めの過剰さであるという。ブラジル人不就学者へのインタビュー<sup>13)</sup>によると、中学校への進学が学校を辞めた共通した理由として挙げられている。ブラジル人児童生徒のたて・よこのつながりは強く<sup>13)</sup>友人や兄弟から中学校の厳しさを聞き、中学校に進学したくないと考えるということが起こっているのではないだろうか。さらに、谷淵<sup>14)</sup>によるとブラジル人の親は日本人の親よりも高学歴志向で、大学院まで進学して欲しいと考えている者も多いが、子どもは中学までと考えており、進学という選択に直面する6年生は、親との考え方のギャップがきわめて大きいことが報告されている。

実際に大学院まで進学することは少なく、現実の厳しさもある。こうしたことも、レジリエンスやセルフエスティームを低下させる大きな要因になっているとことが考えられる。

その一方で、ブラジル人児童において、女子は男子よりも各得点が高く、6年生において性別で比較した時も男子よりも女子の方が各得点が高かった。この傾向は日本人児童とは異なる。川畑ら<sup>15)</sup>、<sup>16)</sup>は日本人小中学生を対象とした調査で、全般的に男子のセルフエスティームが高いと報告している。しかし本調査では、レジリエンスやセルフエスティームが、ブラジル人では女子が高く、日本人では有意差がないという結果になった。足立<sup>17)</sup>によると、日本の小中学生女子のセルフエスティームが低いことの一つの理由として、女子の方が身体の発育が精神の発育に先行し、大人の身体になった自分を「おとな」として受け入れることができずに、「自分のからだが好きだ」ゆえに「自分を好きになれない」と自己否定的になると言われている。それに対して、ブラジル人は日本の子どもよりも身体の発達に対して肯定的である。先行研究<sup>11)</sup>ではブラジル人の子どもたちは周囲の大人たちからの影響によってわりと早い時期から性的なことがらや自らの性的魅力に興味を持ち始めるということが示されている。モデルに憧れオーディションを受けに行く子も少なくなく、異性に対してもオープンである。性的なことがらに関する知識を口にするすることで、ある意味自分たちがいかに「大人の世界」に通じているかを強調し、同学年の日本人生徒よりも物事のわかった存在として自らを優位に位置づける<sup>11)</sup>。このような考え方は、女子のブラジル人児童にとっては、身体の発達がむしろセルフエスティームを高める要因になっている可能性もある。また、若いうちに結婚するという選択肢もあり<sup>18)</sup>、男子に比べたら将来のことを比較的自由に、楽観的に捉えられるという面もある。こうしたいくつかの理由により、特に6年生において男女差が大きくなっていると考えられた。

なお本研究は、調査時期が日本経済の急激な悪化によって多くのブラジル人児童が帰国せざるおえない時期に重なり、そのため、対象とする児童が急減し、多くのブラジル人児童の実態を反映させることがやや難しくなった面もある。そのため、今後はこのような調査を継続して、その実態のさらなる把握に努める必要があると考えられる。

## 引用文献

- 1) 法務省入国管理局：登録外国人統計統計表，2009  
Available at : [http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html)
- 2) 寺島隆吉，河田素子（2003）国際理解教育と日系ブラジル人児童の教育（下）．岐阜大学教育学部研究報告．人文科学，52（1）：63-96
- 3) 太田晴雄（2000）学校の対応—適応教育と日本語教室，ニューカマーの子どもと日本の学校（国際社会学叢書ヨーロッパ編別巻2），191-211，国際書院．東京
- 4) 児島明（2006）日系ブラジル人が生きる学校世界—抵抗のジレンマと創造性，ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー，135-175，勁草書房．東京
- 5) 文部科学省（2008）「外国人児童生徒教育の充実方策について（報告）」．  
Available at : [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/042/houkoku/08070301.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/042/houkoku/08070301.htm)
- 6) 小塩真司，中谷素之他（2002）ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成—，カウンセリング研究，35：57-65.
- 7) 石毛みどり，無藤隆（2005）中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連：受験期の学業場面に着目して，教育心理学研究，53（3）：356-367.
- 8) 長田春香，岩本文月他（2006）中学生の日常ストレスにおけるレジリエンスの意義，小児保健研究，65（2）：246-254.
- 9) 杉岡正典（2007）対日日系ブラジル人親子の進路意識と学校適応感との関連—地域間および学校間比較を中心に—，広島大学大学院教育学研究科紀要，第3部教育人間科学関連領域，56：263-272.
- 10) 朝倉隆司（2005）日系ブラジル人児童生徒における日本での生活適応とストレス症状の関連—愛知県下2市の公立小・中学校における調査から—，学校保健研究，46（6）：628-647.
- 11) 志水宏吉，清水睦美編（2001）「創造的適応」の可能性とジレンマ，ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって—，80-126：明石書店．東京
- 12) 宮島喬（2002）就学とその挫折における文

- 化資本と動機づけの問題, 国政社会 (2) 変容する日本社会と文化 (宮島喬, 加納弘勝編) 119-144, 東京大学出版会. 東京
- 13) 野崎剛毅 (2003) ブラジル人不就学者の生活と意識, 在日ブラジル人の教育と保育—群馬県太田・大泉地区を事例として— (小内透編), 139-154: 明石書店. 東京
  - 14) 谷測真也 (2009) 滞日日系ブラジル人の学校適応, 親子関係及び地域参加に関するコミュニティ心理学的調査—同一地域の日本人親子との比較を中心に—, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第3部教育人間科学関連領域, 58: 183-192.
  - 15) 川畑徹朗 (1996) セルフエスティーム (自尊心) を育てる, 初等教育資料 3月号 (No.647): 68-71.
  - 16) 川畑徹朗, 島井哲志他 (1998) 小・中学生の喫煙行動とセルフエスティームとの関係, 日本公衛誌, 45 (1): 15-26.
  - 17) 足立自朗, 波岡孝子 (1994) 自尊心が集団評価に及ぼす影響について, 埼玉大学紀要, 43 (1): 9-15.
  - 18) 太田晴雄 (2000) 日本の学校を経た子どもたち—5人の事例, ニューカマーの子どもと日本の学校, (国際社会学叢書ヨーロッパ編別巻2), 113-136. 国際書院. 東京